

歴
史
に
学
ぶ
自
己
再
生
の
理
論

加
来
耕
三

歴
史
に
学
ぶ
自
己
再
生
の
理
論

KAKU Kozo

論
創
社

はじめに

今、突きつけられる二者択一

こんなことをいうと、読者諸氏を驚かすようで恐縮なのだが、われわれ日本人は今、一人一人が大きな時代の分岐点に立たされている。それも、のっぴきならない状況で――。

戦後の高度経済成長の残映を求め、夢よもう一度と、国家財政破綻を賭しての大博奕ばくちの道を往くのか。それとも低成長の現実を受け止め、肯定し、経済的効率を捨てた、これまでとは異なる道、今日よりも心豊かな明日をむかえるべく、大きく人生の

舵^{かじ}を切るのか、道は残念ながら二者択一しかなかった。

——歴史はくり返す。

よくアジア・太平洋戦争を歴史的に総括しないから、戦後史が定まらないのだ、という論調を耳にする。が、これは正確ではない。先の戦争は、総括するまでもなく自明の選択を明らかにしていた。

昭和のはじめ、金融恐慌、農産物の潰滅的凶作、世界恐慌を迎えた日本の進むべき道は、今と同じく二方向しかなかった。

一つは日清・日露^{りょうえき}の両役に連勝し、勢いづいた軍国主義をもって、さらなる夢をと、アジア全体へ日本の国威を広げるという選択。もう一つは、世界協調の流れにそって、耐えがたきを耐え、忍びがたきを忍んで、物資的まずしさを精神的豊かさに変える工夫をして、生き残る努力をするか。

現行の維持・延長は、基本的に痛みをとまなわれない。大きな方向転換、変革には、多種多様な痛みがともなう。この二者択一をつきつけられた当時の日本人は、前者を選んだ。

国家も政府も、それを容認した。なぜならば、もし後者の路線を国が強^しければ、国

民が納得しない。なにしろ明治維新以来、度重なる戦争に向かって、国民を引きずってきたのは国家、政府である。

それが急に方針を転じて、必死に獲得した中国侵略の果実まで捨ててしまい、今さら「小さい国」に戻ろうといっても、国民は混乱し、悔吝（悔いうらみ）、反発が国内に巻き起こり、堰き止められた軍国主義の勢いは、国家、政府を否定する方向、すなわちクーデター・革命に向かって爆発することが予想された。

これは紛れもない、史実である。国体（国の性格）が変わることを、国家も政府も恐怖した。

しかし、それは同時に、国家も政府も後者を採らずに前者を選んだ場合、どうなるのか、およその結末は想像がついていた。日本国の破滅である。

当時、中国一国すら講和、終戦に持ち込めない日本の国力（外交力・軍事力も含む）が、ソ連（現・ロシア）、途中からアメリカを相手に、多方面軍事行動を起こして、それらことごとくに勝利できる道理は、何処にもなかった。

このまま進めば間違はなく、日本はさらなる戦争をひき起こし、国力・人口を消耗して、ついには国が滅びることになる。敗戦の必至は、開戦前からわかりきっていた。

が、内乱や革命の危機だけは避けたい、と国家の支配層は考え、国民への不信・恐怖心が、非を覆おおうように戦争回避の決断をにぶらせ、ドイツの勝利に対する過信（他力本願）を加えて、ついには日米開戦に踏み切らせることになった。

歴史はくり返す

日本はアメリカ・イギリス・中国・オランダのA B C D包囲網をはじめ、あまた数多の国を相手に戦い、昭和二十年（一九四五）八月十五日の終戦を迎えた。

この戦争で失われた生命いのちは、軍人・軍属と一般国民（民間人）をあわせて三百万を超えている。原爆症による死者のように、戦後五十年以上たっても増えつづけてきた数もあれば、外地残留で生死不明となった人々も多く、死者の総数は二百五十万人から三百二十万人までと諸説ある。

しかも、餓死も含む戦病死者数は、全戦没者のおよそ六〇パーセントにも及ぶという計算もあった（藤原彰著『餓死した英霊たち』）。

民間人の戦没者数は、およそ八十万人。そのうち国内で空襲などにより亡くなった

人の数は、五十万人に及ぶという（厚生労働省発表）。

多くの人々の死と、原爆の威力によって、日本人は戦後（Post war）、内戦・クーデターを展開するだけのエネルギーも失ったまま、辛うじて祖国再建にハンドルを切ることに成功した。これは生きて行かねばならない、という生理上の想いが、朝鮮動乱による特需と結びつき、高度経済成長へとつながった結果といってよい。

ひるがえ
翻って、読者諸氏に問いたい。

もし今、日本の実体経済に依じて、消費税を四〇パーセントあげる、という政党が現われたとすれば、あなたはその政党を支持するだろうか。おそらくその政党は、その日のうちに解党となるだろう。福祉を切りすてる、公共サービスを軽減する、国民生活に自助努力をこれまでの倍以上努めよ、といった発言を、政府も地方公共団体もタテマエ上はできない。そのようなことをいえば、間違いなく国民の怒りを買うし、支持を失ってしまう。

戦前のあの頃も今日も、国民は内容の差こそあれ、各々の生活上の不平・不満に茹であがっている。戦前の日本は国力が消耗し、多くの日本人が被害をこうむることを知りながらも、国民の求める無理難題、不可能な観念——大東亜共栄圏構想、はっこう八紘

一字^{いちじ}”といった、国家が先導した亡国への道を決断した。クーデター・革命によって、
国体^{くにがら}が変えられるよりも、と敗戦への道をひた走った。

今、まったく同様のことが、われわれ日本人の前途に待ちかまえている。戦争による敗北は、経済効率の破綻と形を変えて現われるだろうが、歴史はくり返す——イギリスの政治・歴史学者E・H・カーは、「歴史は、現在と過去との対話である」といった。ならば今を生きるわれわれは、少なくとも破綻するかもしれない前途を、回避すべき方法を「過去」に探し、学び、実践するべきではあるまいか。

換言すれば、戦前の選択のもう一方^{||}後者を、現代に置きかえる作業、内容を吟味し、一人一人が時代に応じた改善をおこない、平和裡に生き残れる道を探るべきではないだろうか。筆者は、歴史の世界にはそのヒントが数多^{あまた}ある、と信じている。

日本人一人一人の意識が変われば、国家も政府も変わらざるを得まい。

亡国覚悟でつっ込んだアジア・太平洋戦争の惨事——そのあと、日本は戦前の方向を反省し、軍国主義を捨て、戦争を放棄し、焼土と化したゼロの時点から再出発して、世界に冠たる先進国の仲間入りをはたした。

喜ばしいことではあるが、それにしても戦後七十年は長すぎたように思う。明治維

新から昭和六年（一九三二）の満州事変勃発までが、六十三年である。

平成の日本は、国家も個人も、企業も従業員も、大人も子供も、ありとあらゆるものが、明らかに組織（心体）疲労を起こしている。

実際、一九九〇年代以降のバブル崩壊、長期不況を契機とする「失われた二十年」と呼ばれた時代に、日本は先行世代の遺産を食いつぶし、次世代に巨額の借金を背負わせ、辛うじての体面、物質的豊かさを保持しつづけてきた。

ヘーゲルの嘆き

—— 周囲を、見渡していただきたい。

高度経済成長⇨国民の希望、夢を捨てられず、しゃかりきになって景気を回復させようとする政府にあって、教育はいつしか地に墜ちてしまった。

日本人の学力は、世界のトップから大きく後れをとっている。子供たちの学力は、低下の一途をたどっているではないか。かつて、その子供を支えた家庭の団欒は、もはや死語となりつつある。親は子を、まったく理解できないでいる（その逆も、また真

なりである)。

終身雇用制、年功序列の幻想が消えた企業は、大量の契約社員やフリーターを抱え、一方で正社員を減らし、モラルハザードを相次いでひき起こしている。

俳聖・松尾芭蕉の説いた「不易流行」(変えてはいけないものと、変えなければならないもの)の意味を考えず、場当たりに目今の体面のみを繕い、問題の本質を先送りしていく。

結果、企業の生命いのちである、最も大切にしなければならない「信用」を、わずかばかりの面子メンツ(その多くは自己保身、利欲)のために、いともたやすく失墜させてしまう。

一度、失った信用を取り戻すことが、いかに大変なことか、を考えることすらできなくなってしまう。受け手の世間も軽くなり、人のうわさも七十五日よろしく、どのような失礼・無礼も、時が解決してくれる、と信じている人の何と多いことか。

歴史は雄弁に語っている。心からの反省なきものは、同じ失敗をくり返す、と。

経験と歴史が教えてくれるのは、民衆や政府が歴史からなにかを学ぶといったことは一度たりともなく、また歴史からひきだされた教訓にしたがって行動した

ことなどまったくなくない、ということですよ。

(ヘーゲル著『歴史哲学講義』)

日本の現状は、たとえば明治二十三年(一八九〇)、日本へ親善にやってきたオスマン帝国の軍艦エルトゥールル号に似ているかもしれない。旧式の巨船に応急処置を加えつつ、無理な航海をさせて、どうにか日本へはたどりついたものの、その帰路、和歌山の串本沖で沈没する運命となった。乗船者六百人以上のうち、五百八十七人を台風の中で死なせてしまう事件となったが、これと実に酷似している。

一方において、あの時の日本人は立派だった。和歌山県東牟婁郡大島村(現・和歌山県東牟婁郡串本町)の人々は、じつに勇敢に、己れの生命いのちをもかえりみず、荒れ狂う海からトルコの人々六十九人を救出している。

その日本人の「大和心」(やまとこころ)(惻隱あはれいんの情)が通じたのであろう。昭和六十年(一九八五)三月、イラン・イラク戦争の最中さなかにあって、トルコはイラン在住の日本人を救出するために、自国の旅客機を二機、飛ばしてくれた。

心から思う。もし今、「日本」という船が沈んだとき、イラン・イラク戦争と同じ状況になったとき、心から救いの手をさしのべてくれる国や外国の人々が、どれほど

いるものだろうか。

卑近な例ながら、世の中のことに関心がなく、電車の中でスマホのゲームに興じたり、懸命にスマホの画面の中のデータのみを鵜呑みにして、頭に仕舞い込むだけの人は、申し訳ないが本書を読まれても意味がないし、第一、興味も持たれまい。

遺憾なのは、そうした人々の顛末が、本書には具体的に述べられているのだが、おそらくそうした人々は生涯、そのことを知ることもなく、まったく新しい生き方を実感することもなく、生を終えられるであろうことである。

日々、多忙な生活を送る中で、それでもなお、いまの生活はおかしいのではないかと気づきのある方、もっと心豊かに、楽しく生きる方法があるはずだ、と探求されている方を読者対象として、本書は記述している。

解決策は「心学」にあり

結論から述べれば、方法はある。それも、内外の歴史を通じて。なかでも虫めがね風に見れば、日本の江戸時代、今日のわれわれと同じような悩みにとらわれ、自らが

生きがいを感じるにはどうしたらいいのかを、懸命に考えつづけ、ついに答えを導き出した日本人がいた。

のちに石門心学せきもんしんがくを開くことになる、石田梅岩いしばいがん（一六八五〜一七四四）である。

彼は、今でいう契約社員を二十余年つとめ、生きにくい世の中をどうすれば楽しく生きられるのかをひたすら考え、四十をすぎて開悟かいごし、四十五歳になってからはそれを人々に説いて廻まわった。

本書は江戸期以来、今日の日本人にまで多大な影響を与えながら、すでに忘れられつつある日本教学の典型、梅岩の開いた石門心学を物差ものさしに、日本史・世界史の全体から、二十一世紀という新たな時代を踏まえ、これからの日本人としての、個人の生き方について、歴史の叡智、心豊かに生きた人々の実例を紹介しながら、読者一人一人に合った未来Ⅱ「心学」の実践を考え、探してもらうことを目的とした。

いわば、加来流自己再生のすすめ、といえなくもない。本書に取り上げた人々は、すべて何らかの方法でそれを実施し、新しい未来を開いた人々である。

なお、本書刊行にあたっては、数多くの先学諸氏の研究成果を随分と参考にさせていただいた。深い感謝を申し上げる。文中引用文については、そのつどルビを加えない

から出典を明記したが、参考文献については巻末に一括している。ご参照いただければと思う。

また、筆者^{わたし}に「心学」の重要性を三十年前に教えて下さった恩師・勝部眞長先生^{かつべみなが}（故人・お茶の水女子大学名誉教授）、以来、考えつづけ、はじめて筆者が「心学」について述べた「石田梅岩 心を磨く商人学」（『月刊 理念と経営』二〇一二年九月号〜二〇一三年十月号に連載・コスモ教育出版）を許可いただいた同誌編集長（現・編集局長）の背戸逸夫氏^{せといつお}、担当編集者の奥山由希子さん。この度の刊行を引き受けてくださった論創社社長の森下紀夫氏、担当の森下雄二郎氏に、心よりお礼を申し述べさせていただきます。

平成二十八年正月元旦 東京・練馬の羽沢にて

加来耕三

自 歴
己 史
再 に
生 学
の ぶ
理 論

目次

はじめに 004

今、突きつけられる二者択一／歴史はくり返す／ヘーゲルの嘆き／解決策は「心学」にあり

序章 夢と寿命の競争 025

欲⇨智恵、「個」の発生 026

忘却をくり返す国体 029

背後に迫っている「死」 032

「邯鄲の夢」の世界 035

人生は夢かまぼろしか 038

人生には定まった運命があるのか 041

定めなき人生軌道 044

「人生は短い」 047

兼好法師は多忙だった！ 051

第一章

「束の間」の人生をどう生きるべきか……………053

セネカの末路が語りかけたもの……………057

“第二の人生”を考える、は手遅れ……………060

自然と折衷・調和する文明観……………064

仏教・道教・儒教の場合……………067

キリスト教伝来と鈴木正三……………070

本当の自分に踏み出す勇氣……………073

「まさか」の「下り坂」……………074

宇宙の本質は「一仏」にあり……………077

“三毒”と現代人に通じるヒント……………080

元禄バブルが弾けた！……………083

昭和恐慌と酷似した時代……………085

怒りの矛先……………088

第二章

今ならニートの梅岩	092
ゆううつ病、ノイローゼとなる梅岩	094
遊興からの復帰	097
「断章取義」で、人生を考える	099
B・フランクリンの経営倫理	103
自己のアイデンティティを探していた梅岩	106
幕府が抱えた致命的欠陥	109
「病める魂」を抱えながら踊る日本人	112
ほんの少しの勇氣——漱石の『草枕』	115
「桃源境」(理想郷)の現実と「則天去私」	119
生きる目的と生業	123
生計を立てるための人生は過ち	124
ソローの青春時代	127

第三章

意地を通した生活	130
人は何のために生きるのか	133
二種の人間の重要なちがい	136
前向きな生き方とうしろ向きな生き方	138
やむにやまれぬ思い	142
「諸業即修行」	145
「心学」のキー・ワードは「正直」にあり	147
生命懸けて知ろうとした「見性」「心」「性」	150
師に学び、師を超える	153
梅岩、「豁然」と笑う	157
「心学」を身につける	161
感性を心の真中に置く	162
心に静謐 <small>せいひつ</small> を持つ	165

第四章

新しい「心学」の可能性

187

瞑想の力Ⅱ「心の工夫」……………168

“七情”から逃れ、明鏡止水の境地へ……………170

“一ツ三昧”のアドバイス……………173

使えない「心の工夫」は意味がない……………175

「心」こそ人間の本質……………178

恒産と「土」^{すむらい}の清潔……………180

鎌倉武士・青砥左衛門尉の逸話……………184

歴史心理学とホイジンガ……………188

現代に重なる「中世末」……………190

ホイジンガの語る三つの人生……………193

第三の道「夢をみること」こそ……………196

「神はいない」……………199

終章

夢を形に

229

科学を進歩させたもの……………202

急増する「中年」フリーター……………205

「就職氷河期」からみた未来……………207

「大学は出たけれど」の異常な事態……………210

国家財政破綻を食い止める手段……………213

橘曙覧の心……………216

笑いこそ、人生の特効薬……………219

大伴家持と吉田兼好の笑い……………222

相次ぐ肉親の死を乗り越えて……………224

不可解な人・良寛……………230

親を捨て、故郷を出奔……………232

「虎を描いて猫にも成らず」……………235

大愚は大賢に通じたか	237
良寛と似て非なる一休	240
死に損なって傾く	243
破戒僧の厳しい戒め	246
一休の真意と一番弟子	249
短い人生を楽しむ生き方	251
少しだけ、考え方を改める	254
分相応 + a	257
武士はなぜ、死ぬのか	260
伊達政宗の感懐と数寄者	263
人生の秘訣「奥の手」	265